

狭山ひかり幼稚園

正会員 安宅 研太郎 君

郊外に建つ木造平屋建の幼稚園の建て替え計画である。かなり恵まれた広さの敷地に、園庭を取り囲むような形で、ゆったりとうねった平屋の園舎が建っている。園庭が広いので、とても大きな建物に見えるが、そのうねった周りに小さなスケールの庭ができ、板張りでまとめた外観に開口部が区切られていることで、子どものスケールにマッチした印象を受ける。

旧園舎は、従来型の集団保育に呼応した、同じような教室と遊戯室が廊下で結ばれている、というプランであったという。建て替えに際して、園児の自発的な遊びや活動に取り組むことを重視する幼稚園の教育方針を、より活かすことのできる環境をつくろう、というごく自然な発想を、クライアントである長年幼児教育に携わって来られた保育園長と、その教え子であった設計者との協働作業によって、実現されたものである。

教室は裏庭と園庭の双方に面し、教材室やトイレなどの閉鎖的な箱で独立性を保つようにつくられている。年少児室を園の最も奥に配し、遊戯室を挟んで年長児室、年中児室が玄関に近いところにおかれるというオーソドックスな配列構成であるが、それらの教室の真ん中を「大通り」と「こみち」が貫いている。それぞれの教室は、木質系の仕上げ材でまとめられてはいるが、その形や仕上げ、天井高などはいろいろとちがひ、道を歩いているとどんどん場面が変わり、やがては町の広場に出る、というさながら町を探検させるようなつくりである。園児たちは、ある程度まとまった教室での集団の活動のほか、その魅力あふれる町のすべてを使った多くの発見と居場所を見いだせる個々の活動ができるようになっているのだ。

園庭に沿っては光の入る庇をもったテラスが続き、それは日差しをコントロールするとともに、ビニールカーテンが設置されており、冬場にはそれを閉めることでサンルームに変わる。暖められた空気は換気扇により室内に送り込まれる。またその軒先の足洗い場には、ステンレスのドラム缶が置かれ、雨水を貯蓄して園庭への水撒きなどに使われる。このように誰もが理解できる目に見える環境配慮などもされている。

古い園舎を取り壊すに際し、環境の面とコストの面から、できる限りの残土処分や産業廃棄物を減らす工夫として、基礎のコンクリートがらを網カゴに詰めて裏庭におき、根切り土をかぶせてアンデューレーションをつくり、それらを排出せずに敷地内で処理したとのことであった。植栽も既存樹木をできるだけ残し、新規のものにも気を使い、武蔵野の雑木林からの連続を図るなどのきめ細かな配慮がされている。

この幼稚園で育つ子どもたちにとっては、この場での一つ一つの体験そのものが学習であろう。教育理念を理解して、多くのアイデアを取り込み、具現化した計画がすばらしい。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。